図書館だより

第48号　平成21年12月17日
香川高等専門学校高松キャンパス図書館
TEL（087）869−3813
FAX（087）869−3948

読みの多様性について
―読破記講評―

一般教育科　国語
長谷川　隆

大北君の「読書をいかに楽しむか」には、読書は「一種の娯楽」であり「ライトノベル程、読まれることに長けた小説はない」とあります。読書は娯楽であるという意見に賛成です。大北君は西尾維新の小説を読んでの読破記を書いていますが、私は西尾維新を読んだことがありません。読まない理由は時間がないということだけでなく、経験上、はまりこんだら、2、3年は脱出できなくなるのではないかという危機回避からです。はまることなしに読書の楽しみを知ることはできません。

読書にはいろいろな読み方があります。坂井君の「Change the World」には「映画の微分が写真であるように、物語の微分は心の描写」であるとあります。理系の学校ならではの発想ではないでしょうか。森田君の「『1Q84』を読んで」は、今年ベストセラーになった、村上春樹の小説を読んでの読破記です。森田君はオウム真理教を意識していますが、音楽好きな人間であれば、ヤナーチェックの「シンフォニエッタ」とかバッハの「平均律ウラヴィーア曲集」を聴きたくなるに違いありません。

葛西君は、ドストエフスキーの『罪と罰』の大事なポイントをつかんでいます。主人公のラスコーリニコフが自首した後も、自分の罪を自覚できなかった点です。しかし、ポルフィーリィが主人公を追い詰めていく場面などを読むと、推理小説としても読めるのではないでしょうか。すると、同じ作家が書いた19世紀最大の推理小説『カラマーゾフの兄弟』にも興味が湧いてくるでしょう。もちろん、『カラマーゾフの兄弟』は、推理小説と言ってしまうにはあまりにも大きすぎる作品であることは間違いないのですが。

大北君の読破記には、暗号文のような名作を理解する「下積み」として、ライトノベルを読むのだ、と書いていますが、ある名作の「すべて」を理解することは誰にもできません。理解し尽くしてしまえば読み返す必要がなくなるのですが、後で読み返すことを要求してくるものが名作というものだからです。どこかで自分の心に響くものがあると名作の世界に入っていけます。個々の生い立ちが多様なように読み方も多様であり、誰でも自分の文脈で名作を理解しているからです。気軽な気持ちで名作に挑戦してみてはいかがでしょうか。

（はせがわ・たかし）

平成21年度　1000ページ読破記入賞者

優秀賞	Change the World	5年S組	坂井　大介
佳　作	「1Q84」を読んで	2年E組	森田　稜也
佳　作	人を愛し、愛されよ	2年S組	葛西　海人
佳　作	読書をいかに楽しむか	1年2組	大北　昂斗

応募数…204編

1000ページ読破記　優秀賞作品

Change the World

5年S組　坂井　大介

僕の読んだある本に次のような言い回しがあった。

「写真と映画の違いは、俳句と小説の関係に似ている。」

写真がある一瞬の風景を枠の中に描写するように、俳句はある一瞬の心の描写を切り取って少ない文字の中に封じ込める。写真が何十枚、何百枚連続することで壮大な映画になるように、ある一瞬の心の描写は連続することで物語を作り上げる。では、写真と映画の違いはなんなのか。それは変化である。連続する写真には変化が生まれ、それが紡ぎだされて映画となる。小説も同様だ。小説は心の変化を紡ぎだしたものだ。結果、登場人物たちの心は、最初のページと最後のページで違ったものになる。つまり、映画の微分が写真であるように、物語の微分は心の描写なのだ。そう考えると本の中の一言によって、自分の心に変化が起こることにも納得がいく。それはつまり、名画を目の当たりにした時の「それ」や映画を見たときの「それ」と同じなのかも知れない。

僕は、数年前まで読書に全く興味がなかった。読んだことのある本といえば国語の教科書くらいのものだった。今回、僕が千ページ読破をきっかけとして読み返したのは、僕に他の多くの本を読むきっかけを作ってくれた「金城一紀」の作品である。

彼の作品は在日問題や社会的弱者について書かれているものが多く、今回読んだ五作品にもそれぞれ在日朝鮮人が登場したり、民族学校についてのエピソードが描かれたりしている。例えば、今回読んだ作品の「ラン、ボーイズ、ラン」の作中で在日朝鮮人の男子が暴言をはかれると言ったシーンが登場する。彼は「どんな暴言を言われても気にならないが、『チョーセンに帰れ』という言葉だけは許せない。それは、無理やり日本に連れてこられた、自分の祖先を馬鹿にする言葉だ。」と述べている。筆者金城一紀自身コリアン・ジャパニーズで、こういったセリフには彼自身の実体験や彼の思想が込められているように感じられる。彼の作中の人物が発する言葉からは少なからず彼の願いのようなものを感じる。それは差別という見えない力に対し、まっすぐな言葉で書かれている。まっすぐな登場人物のまっすぐな言葉。僕は彼の作品のそれに惹かれた。

「君たち世界を変えてみたくはないか？」

そんな帯のかかった本を友人に手渡されたのは高校二年の夏のことだった。活字の羅列を見るのが嫌いだった僕は読まずにその本を返すつもりだった。「返す前にちょっとだけ」と手を伸ばし、気が付くと最後のページをめくっていた。それは金城一紀の「レボリューションNo.3」という本で、オチコボレ男子高に通う男の子たちが主役の話だった。彼らはその偏差値のせいで学歴社会から「生ける屍＝ゾンビ」のレッテルを貼られ生活していた。しかし、生物教師の「世界を変えてみたくはないか？」という一言をきっかけに、自分たちをとりまく世界を変えるために動き出す。

僕は作中の「彼ら」が大好きだ。彼らは自分の思ったように生きる。他の何者にも縛られない。それは彼らの生き方であり、筆者金城一紀自身の生き方でもあるように思える。彼らは作中で「たとえ信号機が赤だろうと自分の頭で考えて、目で確かめて安全だと判断すれば進む。」と述べている。「信号機によって人々が停止するように、世の中には人を縛る目に見えない何かがある。世の中を支配し、人々を拘束しているのはその操作がうまい誰かである。だから、俺たちは信号機が赤でも自分の判断で進む。」と。彼らは頭で考えて生きるのではなく心と魂で感じたことを大切にしながら生きている。僕はこの生き方が好きだ。世の中にはルールや常識といったものが溢れている。「そういったもの」は少なからず正しいだろうし、「そういったもの」のおかげで少なからず治安が安定しているのは確かだ。だが一方、「ルールで禁止されていないから構わない」といった考えも存在するし、ルールが必ずしも正しいわけではない。戦争がそのいい例だ。当時は、戦争に参加するのが当然とされたし、戦争に参加しないものは非国民とされた。それが国から与えられたルールだった。結果多くの命が犠牲になり、戦後六十年以上たった今も黙祷が行われている。本当に守るべきなのは自分の良心であり、ルールが何を言おうとしているのかを自分で考えて導いた答えなのではないだろうか。彼らの生き方からはそんなことを考えさされる。

僕はこの作中で気に入っている言葉がある。それは、彼らに彼らをとりまく世界を変えるきっかけを与えた生物教師の言葉である。

「君たち、世界を変えてみたくはないか？君たちはなんらかの才能を持って生まれてきている。その才能がなにかを見つけ出し、その才能の世界で生きれば、自然と勉強の得意な奴らの世界は消滅する。」

金城一紀は「世界」という言葉を使うことが多い。「世界」とは周りの文章によってその範囲が異なる言葉だ。ここでいう「世界」は彼らをとりまく環境のことだろう。彼らは周りの人々からオチコボレのレッテルを貼られ生活している。おそらく筆者も少なからず周りから在日のレッテルを貼られた経験があるのだろう。僕たちの暮らす社会は見えない力に支配されている。それは時として悪意を持って特定の個人を束縛する。それが差別だ。誰だって周りの環境を変えたいと思うことはある。では、周りの環境を変えたい時どうすればよいのか。それは筆者の別の作品に書かれている。

「広い世界を見るんだ」。

世界を変えるには今生きている世界の常識に囚われず今よりも広い世界を見る生き方が必要となる。おそらく、まず変わるべきなのは周りではなく自分なのだろう。作中にこんな言葉がある。

「俺たちはいまだにどうやって世界を作り直せばいいかなんて分かってないけど、とりあえず正しいと思えることをしながら、ほんの少しずつでもまえに進んでいきたいんだ。わけの分かんない力に対抗するためには、そうするしかないんだよ、きっと。そのためなら、ひどい目に遭ったってかまわないよ。壊れた世界の中でなんにもしないでぼんやりしているぐらいならね。」

生きている限り自分の納得のいく環境の中にばかりいれるわけではない。もしも今いる環境が最低なら、それが普通と考えずに自分でその場所の常識を変えればいいのだ。周りに流され、人と同じ生き方をしていては人と同じ結果しか得られない。それは決して簡単なことではないだろう。だが、困難を克服する方法はたった一つしかない。「努力」だ。イージー・カム、イージー・ゴウ。簡単に手に入るものは簡単に離れていってしまう。きっと、努力して手に入れた世界はすばらしいものになるだろう。

「Change the World」

世界というのは変わるのではなく、変えるものではないだろうか？

著者　金城一紀

レボリューションNo.3	角川書店……281ページ
フライ,ダディ,フライ	角川書店……246ページ
SPEED	角川書店……298ページ
対話篇	新 潮 社……216ページ
映画篇	集 英 社……363ページ
	総ページ数 ……1404ページ

（さかい・だいすけ）

1000ページ読破記　佳作作品

読書をいかに楽しむか

1年2組　大北　昂斗

私は、本を読むことに少しこだわりがある。それは、「読書をいかに楽しむか」ということだ。

私がこれまで読んできた本は、ほとんど全てがライトノベルだ。ライトノベルというジャンルは実に風当りが悪く、あまり良い印象を持たれないことが多い。しかし、これまでライトノベルに慣れ親しんできた私に言わせてみればライトノベル程、読まれることに長けた小説はないのである。私たちのような若い世代の者にとって、読書とは一種の娯楽のようなものであり、たとえ国語の勉強として文学作品にふれるとしても、その感覚は抜け切らないのである。だから、一口に「読書」と言っても個人の趣向によって読む本、読んだ後の感想なんかが全く違ってくるのだろう。ライトノベルには、私達が読書に求める「個人の趣向」言うところのニーズに対応し切っているのである。そしてその上でさらに、非常に読み易い。私からしてみれば、太宰の書く小説はまるで暗号文で、理解し得ない文章が多々見られる。これは、私が本当の意味での読書というものができていないということであり、読み手である私が、文学作品のレベルにまで追いつけていないということだ。だから私は、歴史上名作と謳われる作品を読むためにも、下積みとしてライトノベルを読んでいる。「読書を楽しみたい」、「名作を理解したい」という私のニーズに応えてくれるライトノベルを。

そういったことから、私がこの夏読んだ千ページも全てライトノベルである。先述したことからも分かる通り、ライトノベルと言っても多々ある。さらに、当然のことながら作家が違えば文章内容は激しく変わってくる。言葉遊び、文章表現。作家ごとに、どういったニーズへ向けて物語を書いているかがはっきりしてくるのだ。そんな数多い作家の中、私が最も良く読む作家が西尾維新だ。私が読んだ今回の千ページは、その西尾維新の著作物のみで構成される。あまり、小説を読むにあたって一人の作家に固執しすぎるのはその作家の考えのみにとらわれるので、あまり良くないと私は思うのだが、西尾維新の著作物には、私を引きつけてやまない魅力がある。

今回読んだのは、そんな西尾維新の著作物の中でも極端な二つのシリーズ、「偽物語上・下」「新本格魔法少女りすか1・2・3」の計5冊である。

「偽物語上・下」は、これより先に出版された「化物語」「傷物語」の続編である。このシリーズは、作者本人「200%趣味で書いた。」と後書きで語るとおり、かなり話が変な方向に行っている。物語だけ読むならマンガを読むのと大差ないのではないかと思ってしまうくらいだった。しかし面白い所は、この作品が映像を使ったドラマではなく、絵を使ったマンガでもなく、文字、活字のみで構成された小説であるという点を上手く使っている点だ。とにかく言葉遊びが多く、日常では聞きもしないような言葉がたくさん出てくる。ただ漢字を変えただけなのに全く違う意味になったり、一語変えるだけで表裏になったり、並べて書くと同じように見えるけど全く違う意味の文章等、言葉だけでなく、小説の一行の文字数や改行までも駆使して文字だけで視覚に訴えかける言葉遊びというものをこの作家は見せてくれる。ライトノベル作家ながら、こういった才にはとび抜けたものがある。おそらく書いている本人も、かなり楽しみながらこのシリーズを書いているのだろう。そういったものが見えて、読み手が非常に楽しめる作品だ。

次に、「新本格魔法少女りすか1・2・3」だが、この作品はただ「えげつない」と言うしかない。私は、この本のタイトルを見た時、西尾維新という作家が「魔法少女」なんてものを主として書くとはとても思えなかったので、読み出すのに勇気のいる作品だったのだが、一冊読み終わる頃には私はこの作品の作者が西尾維新であることを思い知らされた。内容はまさに「新本格魔法少女」としか言いようのない、本格的な魔法少女と主人公を描いたものでった。本格的過ぎたのである。とにかく、グロテスクな描写が多かった。タイトルから、二次元的なストーリーでも展開されると予想していたものだから、その内容にはかなり驚かされた。当然、この作品は魔法が登場するのだが、それもファンタジーやゲームなんかで出てくるようなものでもなく、今を生きる現代人が思いついたとは思えないようなかなり生々しさのただよう、「魔法」というメルヘンな言葉のイメージを一掃させてくれるようなものだった。何より印象に残っているのが主人公で、この作品の主人公、小学四年生という幼さで、人間全てを見下している。作品の中に主人公がクラスメイトと会話するシーンがあるのだが、そういったシーンでは、本当に小学四年生であることを疑わざるを得ない状況に陥ってしまう。表面では何でもないような会話をして、内ではものすごく見下した考えを持っているというのを文章で表現している部分を読むと、なんとも不安定になってくる。

とにかく、この作品は「タイトルのイメージを崩れさせるが、タイトルをしっかりと体現する」というなんとも不思議な作品であった。

さて、私は西尾維新という一人のライトノベル作家の作品を非常に気に入っているのだが、正直なところ、あまり読書する力はのびていないのではないかと思う。先に、名作を読むための下積みとしてライトノベルを読んでいると書いたが、それにはどうしても限界というものがある。自分はまだライトノベルすら読み解くことはできないが、読み解こうとする意志は、ライトノベルを四年間読みつづけた今、築くことができたであろう。ライトノベルは暇つぶしに、楽しむために読めば良いものになったかもしれない。しかし西尾維新を読み学ぶことは、やめないだろう。これだけは断言できる。その理由は、彼の思想にある。

どんな作品でもそうだが、作家とはその独自の思想や考察を登場人物に語らせることが多い。中には、自分の思想を人々に伝えたいがために物語を書く人もいる。西尾維新もその類にもれず、良く自分の考えを登場人物に語らせ、あるいはあとがきで語っている。そういう思想や考察が私にぴったりなのである。物事を考える時に必要なのは、個人の根底となる思想や考察である。彼の考察は非常に面白く、参考になる上になんというか、自分にすごくなじむのである。そういった考察力も国語には必要ではないかと私は思う。だから、私は西尾維新を読みつづけ、物事を客観視する術を、考察の根底となるものを築くため、学んで行きたいと思っている。

著者　西尾維新（講談社）
・偽物語　上……321ページ
・　〃　　下……323ページ
・新本格魔法少女りすか　1……245ページ
・　　〃　　2……247ページ
・　　〃　　3……183ページ

（おおきた・あきと）

読書感想文　佳作作品

「菊と刀」を読んで

3年C組　福上　大貴

すごい、僕はこの本を読んだ後まずそう思った。それはインターネットなどが無くて情報を収集するのが困難だった時代に、海の向こう側の国の歴史や、国民性などをとても細かく、筆者はこの本にまとめているからだ。しかも筆者は日本を訪れたことがないのに、アメリカにいる日本生まれの日系一世や二世の人々の話を参考にしただけで本を書いたということに驚かされた。

太平洋戦争において日本軍とアメリカ軍の作戦や考え方も全く別のものであったとこの本には書かれていた。僕は兵士の命を大切にしなかったことが、日本が戦争に負けた原因の一つではないだろうかと思った。二年生の時に授業で、「沖縄の手記から」という沖縄戦の悲惨さが描かれた小説を読んだ。その時、怪我を負った兵士や、病気にかかった兵士など軍隊が行動するにおいて足手まといになる兵士は置き去りにするというのが常識であったということを学んだ。また、アメリカ軍の戦闘機は防弾のための設備がしっかりされていたのに日本軍の戦闘機は性能を上げるためにそのような設備がしっかりとされていなかったという話を聞いたことがある。神風特別攻撃隊や人間魚雷「回天」なども、戦争に勝つことだけを考えて、人間の命を顧みない日本軍を代表する作戦だったと思う。

そのような作戦を発案して、実行に移すこと自体が戦争を続けていく物理的な余裕と精神的な余裕を無くしていたのではないだろうかと思った。戦争を続けていくことがもう無理だと感じたら、すぐ降伏すべきであったと思う。そうすれば、多くの人々の命が助かっていたと思う。

それが出来なかったのは、日本は「精神力で勝つ」とか「精神力が足りないから負けている」など、精神力というものに重点を置きすぎたからだと思う。だから、まだ戦争を続けられるというように考えたのかもしれない。精神力だけでは、戦闘機や軍艦などを破壊することは出来ない。まして、それだけでは絶対に戦争に勝つことは出来ない。それしか見られなくなったということも、余裕を失っていたことを表していると思う。

この本を読んで、日本人の国民性というものは、徐々に失われつつあるのではないかと思った。江戸時代では、武士が失敗などをした時は、切腹という方法でその汚名をすすごうとした。たとえそれが小さなことであろうと、目上の者に恥をかかせたのであれば、命を自らの手で断った。

しかし、現代では、自分が失敗をしたとしても、謝ったら多分許してくれるだろうという甘い気持ちや考えでいたり、失敗を人のせいにしてしまう人などがいる。だから、自分の行動にはもっと責任を持つべきだと思う。

もし間違ったことをしても命まではとられることはないだろうと思うけれど、自分の間違いを認め、それを今後の行動の中に活かしていくことが重要なことだと思う。

しかし、日本人が失わずに持ち続けているものもあると思った。それは自分を犠牲にして、他人を引き立てたり、他人の命を助けようとする自己犠牲の精神と、一度自分が受けた恩は必ず返すという義理を重んじるということだ。最近はあまり聞かないが、少し前まではテレビで、駅の線路に落ちた人を助けようとした人が電車にひかれてしまって亡くなってしまったというようなニュースを耳にした。このような人達は、とても勇気と行動力がある人達だと思うし、このような人達がいたからこそ、日本人は自己犠牲の精神を失っていないと思う。もし僕が線路に誤って落ちてしまった人を見たとしても、線路に飛び込めるかどうかは分からない。もちろん人を何とかして助けたいという気持ちはあるが、もしひかれてしまったらどうしようと考えてしまうからだ。僕も、自分のことを第一に考えて行動するのではなくて、ただ人のことを思って行動ができる人間になりたい。

また誰かに助けてもらったり、誰かから何かをもらったりすると、その礼を必ずするということも失っていないと思う。お中元やお歳暮といった習慣がその例である。たとえ小さなことでも人から受けたことは人に返さなければいけないというような考えは、一見、面倒なことのように思えるが日本人独特の考え方だと思うので大切にしなければならないと思う。

現在、産業や工業などの技術がどんどん進歩していて生活に便利なものが大量生産されている。これらのものが人々の生活を楽にするのは良いことだと思うが、日本の文化を少しずつ奪っているような気もする。便利なものを効率的に使うのも良いが、文化や生活の知恵などを大切にし、次の世代へと繋げていくことも忘れてはならないことだと思う。

ベネディクト・角田安正訳　菊と刀　光文社

（ふくがみ・だいき）

図　書　委　員　会　か　ら

古本市について

3年M組　中川　夏希

今年は新型インフルエンザの影響で、皆楽祭自体が中止となる可能性にドキドキしながらも無事当日を迎え、私達図書委員も古本市を開くことが出来ました。

古本市では、先生方や学生より持ち寄られた書籍やCDの販売をしています。もちろん持ち寄られた本なので、かなり古い本であったり、見たことのないようなマイナーなものがあったりして、普通の本屋しか行かない私にとっては、楽しいものでした。

この古本市での売上げは、図書館をより良くしていくために使われます。もちろん古本なのでたくさんの売上げがある訳ではないので、大きくどうこう出来るものではありませんが、もし皆さんの中で図書館を使っていて、した方がいい事、あったらいい物がありましたら近くの図書委員を捕まえて言ってもらえれば変わる事があるかもしれません。

本の好きな人や勉強のために来る人はもちろんのこと、興味のない人や活字だけの本は嫌だ、という人も一度図書館に来てみてはいかがですか。もしかすると自分の気に入る本が見つかるかもしれませんよ。

（なかがわ・なつき）

本　等　と　の　出　会　い

数学の本を英語で読んでみませんか。

一般教育科　佐藤　文敏

アメリカの大学で英語のつたない留学生がいると数学の授業を受講することを薦められます。理由は大きく別けて二つあります。一つは英語がつたなくても数学的事柄が理解できれば点数が取れること、もう一つは数学で使う英語は基本的に現在形しかなく、使う単語、言い回しも決まっているため一度言い回しを覚えてしまえばその後はすんなり英文が読めるようになり英語も出来るようになった気がして自信がつくからです。

ですので、英語が出来るようになりたいけれど苦手だという人や、数学は英語よりはとっつき易いと思う人は既に習った数学的事柄を今度は英語で書かれた教科書で復習してみてはいかがでしょうか。微分積分であれば、Dale Varberg, Edwin J. Purcell, Steve E. Rigdonによる“Calculus with Differential Equations”、線形代数であればHans Schneider, George Phillip Barkerによる“Matrices and Linear Algebra”を読んでみてはどうでしょうか。また、本を買うお金がもったいないと思う人は無料のオンラインコースのテキストなどを検索してみてください。ネットにいっぱい落ちています。例えば、“http : //www.ugrad.math.ubc . ca / coursedoc / math 100 / notes / index . html”などをお勧めします。

英語で数学を勉強すれば、既に習った数学の復習にもなり、英語にも親しめて一石二鳥ではないでしょうか。

（さとう・ふみとし）

頼れる本

機械電子工学科　正箱　信一郎

大学院で溶接などに用いるアーク放電に関する研究をしていた私は、博士課程に進学したときに指導教授から新しい研究テーマを自分で立ち上げることを命ぜられました。修士課程での研究をさらに発展させるのはもちろんのこと、新しいテーマとなるとどうしようかと悩んでいました。

そんなある日、研究室の助教授が「これ、もういらへんからあげるわ。」といって私にくれたのが「溶接アークの物理」という本でした。この本は1984年にランカスターという溶接アーク物理の研究者によって発刊された専門書「THE PHYSICS OF WELDING」の日本語訳版で、溶接アーク物理に関することが網羅されています。しかし、A5判の370ページくらいの本にもかかわらず1万円もするのでなかなか個人では手が出ない代物です。しかもすでに絶版です。これがタダで手に入るのだからラッキーなのですが、いらないというだけあってブックカバーは日焼けしてビリビリにやぶれ、小口は手あかで黒く汚れ、ページも所々欠落していました。これは確かにいらないなと思い、あまり読む気にもならずパラパラと眺めた程度で本棚にしまいました。

しかし研究方針や内容についての考えがいよいよ行き詰って相当悩んでいるとき、藁をもすがる思いでこの本を読んでみたところ、衝撃が走りました。今まで悩んでいたことがすっきり整理され、新しい知識がどんどん頭に入ってくる気がしました。なんで今までこれを読まなかったのかという思いと、宝物を見つけたような感覚と、私が行き詰っているのを知ってか知らずか、この本をくれた助教授への感謝の思いがこみあげてきてニヤニヤしながら読んだのを覚えています。

それ以来、事あるごとにこの本を開き、いろいろなことの理解にものすごく役にたっています。今でも私にとっての「頼れる本」です。単に知識を深めるために読んでみたのならそこまでの思い入れはなかったかもしれませんが、本当に行き詰っているときに助けてくれた本なので特別な思いがあります。

本の内容は学生のみなさんには少々難解だと思いますし、完全な専門書（溶接の、しかもアーク放電に特化している）なので、いい本だからみなさん読んでみてくださいと勧める気はありませんが、みなさんも私にとっての「溶接アークの物理」のように、行き詰ったときに頼れる本をぜひ見つけてください。

（しょうばこ・しんいちろう）

私の推薦する図書

理系バカと文系バカ　新着

竹内　薫（PHP研究所）

皆さんは高専を選んで入学してきたのだから自分のことを「理系」だと思っている人が多いでしょう。あるいは、専門が苦手だから「文系」だと言っている人もいるかもしれません。でも、そんな垣根を勝手に作って閉じこもっていても面白くありません。みんなで文理融合センスを磨きましょう。

機械工学科教員　吉永　慎一

佐藤の読む数学　新着
佐藤の読む数学2

佐藤善一（大和書房）

これら2冊の本は、受験生に数学の面白さを口語調で説明した珍しい本です。内容も低学年の数学全般を網羅し、興味を持った部分から輪切りに読むこともできます。三角関数の加法定理などサラッと書いてあるけれど、実は超難問だったりするのが感動的ですょ。

建設環境工学科教員　向谷　光彦

数学ガール

結城　浩（ソフトバンククリエイティブ）

「僕」、ミルカさん、テトラちゃんの3人が難解な数学を解きながら恋をしていく「青春・数学・物語」。小学生でも楽しめるクイズから大学生や数学教師でも難しい問題まで幅広く解いています。

彼らは数学を解いていく中で何を見つけるのか？そしてあなたは何を見出せるのか？

今回は偉大なる数学者レオンハルト・オイラー先生についての話です。

3年E組　木村　公祐

マンガでわかる統計学
マンガでわかる統計学［回帰分析編］
マンガでわかる統計学［因子分析編］

高橋　信（オーム社）

統計計算なんてめんどくさいだけと思っているあなた、統計計算の本当に意味がわかっていますか？実験結果や研究成果の解析に大いに役立ちます。あいまいさのもっとも客観的な処理／表現手法なのですから!! 3S諸君に1冊目を、5S諸君に3冊すべてを薦めます。

機械電子工学科教員　平岡　延章

新しい太陽系　新着

渡辺潤一（新潮社）

太陽系第九惑星だった冥王星はなぜ惑星から外されたのか？2006年の夏の降格劇の経緯を専門外の方にも分かりやすく説明した入門書です。また、冥王星以外の惑星についても、最新の情報で解説しており、宇宙への興味がそそられる一冊です。

機械電子工学科教員　相馬　　岳

目で見てわかるはんだ付け作業　新着

野瀬昌治（日刊工業新聞社）

はんだ付け職人のハンダ付け講座―オールカラー

野瀬昌治（ブイツーソリューション）

実験で、卒研で、特研で、部活でモノづくりをするあなたにとって必見の一冊です。電気電子回路の試作、開発、研究に欠かせない手はんだ作業について、多数の写真を用いて解説した良書です。はんだ不良でトラブルをまき散らしているあなた、急がば回れですよ。

機械電子工学科教員　平岡　延章

脳と気持ちの整理術　新着
―意欲・実行・解決力を高める―

築山　節（NHK出版）

人生は思い通りにならない時間が長いものだと思います。だからこそ、その間をどう過ごすか、ということが大切になってきます。本書は、「逆境や困難に直面したとき、それをどう乗り越えていけばいいか」を、脳機能の観点から解説した本です。

電気情報工学科教員　村上　幸一

淀川ものがたり

淀川ガイドブック編集委員会（廣済堂出版）

淀川は、4世紀ごろから河川交通の川の恵みを積極的に川や周辺の土地に対して、堤防や運河による治水・利水の手を加えて文化的地域を築いてきた人の世の物語がある。また、今の河川の水質では考えられないが、当時の江戸時代まで淀川の水を、飲み水として生活できるきれいな水都であった。

建設環境工学科教員　松原　三郎

最新！自動車エンジン技術がわかる本　新着

畑村耕一（ナツメ社）

マツダのミラーサイクルエンジン開発の中心人物であった畑村氏の著書。自動車エンジンの基礎からエネルギ効率向上のための最新技術まで、図を多用してわかりやすく解説されている。最近話題になっているHCCI燃焼にも踏み込んで解説されているので、自動車エンジンについて深く知りたい人にはぜひ読んでいただきたい一冊である。

機械工学科教員　小島　隆史

マンガでわかる相対性理論

新田英雄、山本将史、高津ケイタ（オーム社）

5S物理学Ⅱの副読本として最適です。もちろん、相対論に興味を持つみなさんにも…。黒板の下手くそな図を、この本のコマと入れ替えてみましょう。教科書と授業ノートとこの本の組み合わせは、きっとみなさんを相対論の正しいイメージへと導くでしょう。

機械電子工学科教員　平岡　延章

新しい「マイケル・ジャクソン」の教科書　新着

西寺郷太（ビジネス社）

ぼくが最近読んだ本で気になった本を紹介。

時に暴力をともなう英才教育によって育て上げられた歌とダンスの天才児はいかにして世界のスーパースターとなったのか？未曾有の枚数を売り上げた「スリラー」の呪縛、肌の色素が破壊される病「尋常性白斑症」。マイケル研究の集大成。

4年C組　木村　健人

Hot for Words：Answers to All Your Burning Questions About Words and Their Meanings　新着

Marina Orlova（Harper Paperbacks）

セクシーな女性（著者本人）が表紙（本の中にも写真あり）を飾っておりますが、内容は（比較的）マジメです。YouTubeのプログラムでは、「Intelligence　is　Sexy」をモットーに言語学者（philologist）である著者が、言葉の語源について話す形式になっています。本著は、このやり取りをまとめたものです。YouTubeプログラムは、英会話（listening）の練習にもなるので、一見してみてください。YouTube内で「hotforwords」（スペースなし）で検索、著者はロシア人なので訛りが強いですが、鍛えられますよ～。

機械電子工学科教員　由良　　諭

私の推薦する図書

図説　地図とあらすじで読む古事記と日本書紀　新着

坂本　勝（青春出版社）

日本最古の歴史書とされる古事記と日本書紀。しかしながら、その世界観は独特かつ複雑で素人には分かりにくいものです。本書は図表を多く取り入れることにより難解な世界観を明瞭に解説した入門書です。秋の夜長は1300年前の世界観に浸ってみるのも一興でしょう。

機械電子工学科教員　相馬　　岳

探偵小説のためのエチュード「水剋火」　新着

古野まほろ（講談社）

最純粋の本格劇。陰陽だの怨霊だのといったケレン味溢れるギミックに彩られたその世界、しかしまるで論理的。情動的煽動的特異的文章構成を貫くのは正しく本格への忠誠とでも云うべき姿勢だ。万里は論理の為に。万事は本格の為に。

正統なる本格推理の継承者『古野まほろ』を読まずして本格を語ること能わじ。

5年E組　矢野　正人

ひかりをすくう

橋本　紡（光文社）

この物語はありふれた日常を描いた物語です。ありふれた当たり前の日々が描かれていることで普段見えない、あるいは見ないようにしている事をあらためて実感させられるような物語です。

3年M組　中川　夏希

あたりまえのことをバカになってちゃんとやる　新着

小宮一慶（サンマーク出版）

人生は、題名のようにABCが大切だと言っています。これはビジネスマン向けの本ですが、学生にとっても面白い内容だと思います。本の通り出来るかどうか、書店で手に取ってみては如何でしょうか。

電気情報工学科教員　横内　孝史

1Q84 BOOK1、BOOK2

村上春樹（新潮社）

ある時期以降の村上春樹的世界は、ライトノベルやファンタジー（ダーク系のもの）などの読者にとって、実はとても親しく感じられるものだと思う。

というわけで、ベストセラーの新作です。ラノベ／ハリポタ道を行くそこのあなた、ここを足がかりにちょっと新しい世界に入ってみませんか？

一般教育科教員　高橋　宏明

日本文学史序説〈上〉〈下〉

加藤周一（ちくま学芸文庫）

日本文学といっても、古事記から現代に至るまで、日本語・漢文取り混ぜて膨大な作品がある。それらを自分自身の視点で深く読み込んで、鮮やかな通史を組み上げてみせた、知的力業としか言いようのない本。単に日本文学史というよりも、思想史、文化史として、これに並ぶほどのものはもう現れないのではないかと思わせる。

著者は昨年末に亡くなったが、それまでこの本を手に取らずにいた自分を少々恥ずかしく感じている。

一般教育科教員　高橋　宏明

図書館からのお知らせ

◆年末年始の開館時間等について

年末年始の開館時間等は，下記のとおりですのでよろしくお願いします。

12月25日	9：00～17：00
12月26日～1月3日	終日閉館
1月4日～5日	9：00～17：00
1月6日～平常通り	9：00～20：00

◆冬季休業中の長期貸出について

恒例の冬季休業中の長期貸出（学生のみ対象）を下記のとおり行います。

貸出開始日：12月17日(木)～
返 却 期 日：1月7日(木)
貸 出 冊 数：20冊まで

■新着DVD

20世紀少年　第二章
遠い空の向こうに
キャッチ･ミー･イフ･ユー･キャン
幸せのちから
ハリーポッターと謎のプリンス
スラムドッグ$ミリオネア
天使と悪魔
7つの贈り物
サウンド･オブ･ミュージック
ベンジャミン･バトン

■新着CD

THIS IS IT(Michael Jackson)
ザ･サークル(BON JOVI)

編集後記

前号でも心配していた新型インフルエンザがいよいよ本格的に流行しはじめました。高松キャンパスにおいても高度化再編記念式典や学園祭の開催が危ぶまれましたが、無事開催することができました。また恒例の古本市も、本号に中川レポートがありますが、問題なく店開きができました。これからもこのウイルスが暴れないよう、ウイルスがまた連合艦隊を組んで攻撃してこないよう祈ります。香川高専高松キャンパスになってはじめての「図書館だより」となりましたが、今後とも変わらないご支援をよろしくお願いします。